

活動報告：ぶんぶんクラブ

1. 完成年度を迎えて～「ぶんぶんクラブ」の背景～

2010年、本学に学芸学部子ども学科が設置され、このたび2013年度にて学部・学科の完成年度を迎えた。「ぶんぶんクラブ」は子ども学科の誕生とともにスタートした学生ボランティア活動である。

子育て支援が本格化してから、我が国は乳幼児を育てる親への様々な支援を行ってきた。しかし、ひとたび乳幼児期を経るとその支援の様相は見えにくくなるのが昨今の現状である。そのため、「子育て支援事業」は今まさに新たな転換期をむかえようとしており、そこには、“地域”をキーワードとした、世代を超えた関わりの中で子どもを育てよう、次に子どもを産む世代を育てようという動きがある。乳幼児期を経てもなお子育ては続き、児童期・思春期・青年期とますます保護者にとっては難しい時期をむかえる。妊娠・出産から育児そして子ども達の自立まで、切れ目のない支援を行うことを念頭においたとき、待機児童の解消や預かり保育の充実といったことはもちろんのこと、単に親が子どもを預ける場所を保障するだけでなく、「子どもの最善の利益」が実現される社会を目指し、子育て家庭・地域・次世代を担う若者がつながっていくことが必要であろう。

そこで、本学では子ども学科誕生を機に、親子を地域で絶え間なく支援することはできないか、大学で幼児期・児童期・思春期を連続して支えその先に次世代の親となる青年の育成をすることはできないかと、その支援のあり方を模索しはじめた。「ぶんぶんクラブ」は広島市安佐南区長束地域を中心に、地域の子どもたちと大学生が日常的に触れ合うことで、切れ目のない子育て支援ができる地域づくりについて、地域の人々と共に考えていくことを目指す活動である。

2. これまでの「ぶんぶんクラブ」の経緯

以上のようなねらいのもと、2010年度、子ども学科の編入生3名、1年生7名を中心に「ぶんぶんクラブ」を始動した。はじめは、地域の児童館を見学に行ったり、子ども達のために出前劇を考えたり、子ども達とふれあう機会を探す日々が続

いた。6月からはじめた児童館との交流も最初は互いの思いを話し合うことすら困難であったが、学生が子ども達のために7月の児童館主催の七夕イベントにて劇を披露したのをきっかけに後期より本格的にボランティア活動がスタートした。活動人数や頻度としては、スタッフ1名（教職免許を有する本学園OB）と学生ボランティア（交代で随時4名程度）が週1回（主に木曜日）児童館において児童と交流するものであった。その後、音楽学科演奏のクリスマスコンサートや卓球大会などの行事を経て子ども達との交流を深めていった。なお2010年度末、学生ボランティアがレクリエーション・ボランティア研究会としてサークルを発足し、組織的に「ぶんぶんクラブ」の活動を行うこととなった。

当初は、本学子ども・子育て支援研究センターにて放課後児童クラブを開設する計画もあったが、児童の日常生活を維持した形での学校間交流をめざし、ぶんぶんクラブメンバーが児童館にて交流する形で活動をはじめた。

また、学生は、児童館での交流後、大学へ戻り反省や感想についてカンファレンスを行っている。そのカンファレンス内容を振り返ってみると、学生は交流を重ねるにつれて、子どもの状況について話すだけでなく、子どもの変化や特徴に目をむけるようになっていった。さらに子どもの変化に関する自分の感情や関係性について示すことが多くなっていった。大学生にとって、子どもの日常に飛び込み、その中で自分の役目を見つけながら子どもとの関係を継続的に深めることは、子どもに関する深い洞察と、よりリアリティを持った子ども・子育て感覚を培うものになることが伺えた。

また、2年目を迎えると「ぶんぶんクラブ」の活動は広がりを見せ、年間40回をこえる児童館との交流に加え、20回以上の幼稚園でのボランティア活動、地域の幼稚園・児童館・公民館などでの出前劇といった様々な年齢の子ども達とのつながりをつくっていった。

学生達のカンファレンスにおける振り返りにおいても、子どもとの関係性について示すことはもちろんのこと、それに加え関係性の中での年齢別の言葉がけのあり方について分析的に話し合う様子がみられた。子どもとの楽しいふれあいだけでなく、子どもと共にネガティブな葛藤状況を共有

できる関係性の構築へとつとめていっていることが伺えた。学生達は、「ぶんぶんクラブ」の活動によって、単なる子どものかわいらしさや楽しさを知るだけでなく、リアリティを持った子ども・子育ての感覚をより一層強めていっているように見受けられた。

そして3年目ではこれらの活動を定着させ、地域の中でそのボランティア活動が話題となり、単発の交流やボランティアの依頼をうけるようになった。このころになると学生達は、振り返りのカンファレンスの中で安全面や教育的支援について考えるようになっていった。子ども達の利益となることは何なのか、学生達なりに考えを深めていっている様子が見られた。3年間の活動を通じて、地域の中で大学生と地域の人々がつながっていくだけでなく、次世代に親となる学生が確実に子育てへの意識を高めていっている手応えを感じた。

3. 2013年度の活動状況

さらに、完成年度である本年度は、「ぶんぶんクラブ」の立ち上げメンバーの卒業の年でもあり、継承が大きな課題となった。地域の幼稚園や児童館、公民館などとの1年間の主な活動状況は以下のとおりである。

- ・児童館との交流：年間40回程度（宿題指導、遊び、卓球指導、一輪車指導など）
- ・幼稚園との交流：年間20回程度（保育補助、遊びなど）
- ・幼稚園・児童館・公民館などでの出前劇（七夕やクリスマスなど）

地域でのこれらの活動が定着する一方で、学生達は活動のマンネリ化と、本来のねらいである「子ども達や地域とのつながり」をいかに後輩たちに継承していくかという大きな問題を抱えた。

しかし、学生達は振り返りのカンファレンスや子どもに関するミーティングを重ねる中で、ボランティア活動の礼儀や感謝の気持ちといった基本に立ち戻り、「子どものために」活動しているということを再認識していった。学生のカンファレンス記録の一部を以下に紹介する。

- ・子どものために必要なことを前もってもっと準備すべきだと思った。
- ・子ども達と一緒に活動し、注意すべきところは

しっかりと声かけをしていくべきだ。

- ・1人であそんでいる子にも積極的に声をかけていったほうがいいと思った。
- ・暴力をふるう子の気持ちを考えてあげたいと思う。 などなど

これらの学生達の声からもわかるように、自分たちは子どものために活動しているのだということ意識し直し、一人ひとりの子どものために何ができるかを懸命に模索しながら、子ども達や地域の人々をつなげるために必要なことを自分たちなりに後輩へと受け継いでいっていることが伺えた。

このように、4年目の本年度は、「ぶんぶんクラブ」の活動の意義があらためて問われる一年となった。学生達の積極的な話し合いの中から、単に地域の中のつながりをつくるだけでなく、次世代を担う若者に地域の中で子ども達を大切にすることはいかなることかを考えさせる重要な活動であるとあらためて実感できたことが大きな収穫となった。

4. 「ぶんぶんクラブ」のこれから

以上のように、「ぶんぶんクラブ」は、地域の児童館や幼稚園、公民館のご協力のもと子ども達と若者をつなぎ、次世代の地域を活性化させる重要な活動となっていっている。

ただし、様々な世代が子どもや青年と共に子育てしやすい地域づくりを模索するという目的を達成するためには、今後に向けてさらなる発展的な取り組みが必要となる。

例えば、大学・小学校・幼稚園を中心に地域の安全が確保され、その上で学校が地域に対してオープンな施設となり、多様な世代間交流を促進していくことも大切な取り組みである。オープンな学校に地域の人々が集い交流していったならば、乳幼児期・児童期・思春期・青年期といった長いスパンで、地域の多くの見守り手を活用した切れ目のない子育て支援を実現することが可能となっていくだろう。その中で、これから子どもを産み育てるであろう若者世代が、子育ての魅力を感じ、自らも地域の子どもたちを育てる一員となるのが長期的に必要な取り組みであろうと思われる。

「ぶんぶんクラブ」は『子育てしたくなる地域づくり』を地域の人々・親子・大学生が共に考える活動へと発展していく可能性を秘めている。

（文責：学芸学部 子ども学科 若林 紀乃）